
妖幻抄 7章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 7章

【ZPDF】

Z0946A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

村を出た三人(?)は、自由を求めて、旅を始めた。果てのない旅が、今、ここに幕を開ける!!

風籠 ふづらい（前書き）

こんにちわ、維月です。

さて、そんなこんなで旅を始めた三人（ヨミは、人じやなくて、匹
？かなあ…）ですが、まだ、宛がないというか、なんというか…
これからも、よろしくお願ひしますね。

風籠　ふうらわ

「そつれにしても、ねえなあ…ヒトツ子一人いやしねえとは二人は、溶けて、すでに形すら留めない、ビル山の狭間を歩いていた。

風が、砂塵を舞いあがらせていく。

しかし、見わたす限りに連なる山脈は、かつて、ここに栄えた、大都市の面影を、色濃く残していた。

「ここに…昔は大きな衙まちがあつたって、父さんが、教えてくれたことがある」

「ふーん…それにしても、昔の人間たあ、すげえよな。あんな鉄の山を作つちまうんだから、今とは、えらい違いだ」氷雨は、鉄くずを蹴飛ばしながら言つ。

「うん…あれ、ヨミは？」

明は今になつて、傍にヨミがいなこと気に気がついた。

「ああ、こいつなら、ここだ」

「チイツ！」

氷雨が、ズボンのポケットをつつくと、ヨミが顔を出した。

「そこにいたのか、おいで…」

明が手を伸ばすと、ヨミは彼女の腕を伝つて、頭に乗つた。

「行くぞ、明…とりあえず、衙、捜さねえと」

氷雨は、強く明を抱き寄せる。

キルル、ヨミが、居心地悪そうに髪の中で啼いた。

明たちは、氷雨の村から、西へ西へと進んだ。

進むうちに、やがて、草に埋もれ、放棄された村をいくつも、見かけるようになつた。

「まだ、誰もいない」

明は、あばら屋の中を見まわした。

破れた扉が、風に揺れて軋つてゐる。

「チイイ…」

明の肩で、ヨミが、哀しげに啼いた。

「ここに、棲んでいたヒト達は、どこに行ってしまったんだらうな？」

ヨミの喉を、撫でてやうながら、明も、ぱつりと咳く。

「明」

そんな明を、小屋の外で、氷雨が呼んだ。

「なんだ、呼んだか？」

明は、扉の敷居を跨ぐ。

「ここに、住人がいないわけが分かつた…あれ、見てみる」

氷雨は、草むらを指さした。

そこかしこには、丈の長い草が、生い茂つてい。

「なに…なにがあるの、か…」

明は、絶句した。

丈の長い草に、埋もれてもなお、確かに『それら』は、そこにはあつた。

草の陰に、見え隠れする白い塊。

白骨の、群れだつた。

「ほ、骨！」

「ずいぶん前に、滅びてたんだろう。どうやら、連絡がつかなかつたわけだ」

「連絡？」

「ああ、俺らの群れのほかにも、同族の村が、いくつもあるんだ…

この村は、そのうちの一つだよ」

「ひどい、ほかの妖魔がやつたのか！？」

「そいつ、ここに匂いを残してやがる」

「えつ？」

匂いを残す、つまり

氣配をここに残し、再び現れる可能性

が、非常に高いことを意味するのだ。

「እናወንታዬ, በጥጥል...」

「ギッ、キュウウ！」

その名を聞いたヨミが、慌てて、明の眼

「鉤吾！？な、せ、そ、ん、な、モ、ノ、が、こ、こ、う、」

録君とは
元褐色をした象は、くびかが如てある
毒はない。
ノハハ、幼年は狡猾、ハ、強い頭は、睿智

毒はない
しかし
重作は悔々で
強い罠には
容易に岩石をキistik
本来なら、高地にすむ妖だ。

「分からん、そいつに襲われて、この村は亡んだつて」とは確かだ」

氷雨は、心底面倒くさそうに、首をすくめてから言った。

あわや！ 大蛇の穴

陽が、傾きかけている。

すでに、太陽はビル山の狭間で、見えない。

薄闇が、広がっていた。

「丁度いい、今夜はここで陣を張るか」

氷雨は、洞の壁に触つて言つた。

水滴が、ときおり滴る洞窟内を、一人は松明たいまつを片手に進んでいく。

高く、虚ろな音が、しきりに洞内に響く。

冷氣が、背筋にまといついて、ひどい悪寒を催させた。

「キュウウ…」

「え…どうした?ヨリ!」

弱々しく啼いて、立ち止まつたヨリを、明は抱きあげた。

いつもなら、先頭をきつて歩くヨリが、なぜか今日は、様子が変だつた。

「キルル…キュウーン」

「お前が震えるなんて…氷雨、ちょっと待つてくれないか?」

「明…」

「ここ、なにかいるぞ…なんだろう、いやな匂いがする。なにかが、腐つたような匂いだ」

「それに、生臭いだろ?明、動けるか?」

洞内は、小刻みに揺れていた。
壁が、動いているのだ！

「壁が、動いて!?」

「いや、壁じやがない…」いいつは、委蛇いいだつ、外に出るぞー早くつ

「あつ、ああ!」

「急げつ！?」

一人が、洞窟を出てすぐに、岩山が爆音をたてて崩れる。

砕けた岩石が、雨のように、明と氷雨を襲つた。

「まだくるぞ、走れ！」

氷雨は、走りながら叫ぶ。

「だ つ、しつこにな！ 蛇だから！」

二人を追つて、地割れが近づいてくる。

「くそつ、これ以上逃げても、キリがねえ！」

氷雨は、明を背中に庇い、鋭く舌打ちする。

「どうする、戦うのかつ？」

「待て、止まつたぞ相手つ！」

氷雨は、後ろの地割れを振り向いた。

明は、気を集中させて、気配を探る。

しかし、気配を消しているのか、なかなか場所が分からなかつた。身の内では、警鐘が鳴り続けている、『近くにいる』と言おうとしたその時、服の中から、ミミが飛び出して行つてしまつた。

「よつ、ミミ待てつ！？」

「明！？」

追いかけよつとした瞬間、鳴りひびいた轟音に、地面が揺らいだ。氷雨が、きつく明を抱き寄せて、庇つた。

「ミミがつ！ ミミ つ！？」

砂塵が晴れると、月光を浴びて構える、大蛇がいた。

蛇は、威嚇音を発しながら、大きく裂けた口から、牙を剥ぐ。

「あ、明、ダメだ！ 動くなつ！」

ゆらり、と立ちあがつた明を、氷雨は慌てて引き留めた。

「離してくれ、氷雨…あたしが行く。よくも…よくもミミを…？」

ミミシミシ、と明の姿が変わっていく。

牙が生え、髪と爪が伸び、両頬には、横向きに、牙形の赤い線が浮かび上がつていた。

「あ、明！？」

呼ばれて、髪の間から突き出た、立ち耳がぴくりと動いた。

「すぐ片付ける、そこにいてくれ…」

爪を構える明。

氷雨は、目を見張った。

今までに何度も、明が変化するのを見てきたが、今の彼女の姿は、異例だ。

人狼、という種族こそ同じだが、自分とは、明らかに種類が違っている。

彼女の爪が、蛇の首を引きちぎった。

首は、宙を舞つて落下し、地面が大きくたわむ。

血糊が飛沫いた岩片が、黒煙を上げて、ぐずぐずと溶け始めていた。ふと、視界の隅で、なにかが動いた、と思つた瞬間、明は殴り飛ばされた。

瓦礫の山に激突し、岩片が飛び散る。

「明つ！」

氷雨は、慌てて駆けより、明を抱え起こした。

「なんで動いた、危ないだろ？…」

土を払いながら、明は面白くなさそうに、ぶすくれ顔をする。

「なんでもだつーお前の方が、よっぽど危険だろ？がつ」

「氷雨…」

「つたく、無茶ばっかりしやがつて」

「…ごめん」

さつきまでの、緊迫感はどこへやら。

どこに行つたかといふと、濃厚な、甘い雰囲気に塗りつぶされ、萎縮してしまつていた。

二人は、キスなんかしている。

それを、蛇の頭が『忘れるな』とでも言つように、叩き割つた。

「つとー蛇の分際で…邪魔しようつなんざ、1000年早いんだよつ！」

いいところを邪魔され、怒り心頭の氷雨は、思いきり、蛇の頭を踏み砕いた。

すると、大蛇の首は、ぐずぐずと溶け始め、やがて、骨だけになつた。

「尻尾は溶けねえのかよ……」

「氷雨え、ヨミ、食われちゃつた……」

泣きそうな明を、氷雨は抱き締めてやつた。

「泣くな……死体だけでも、見つけてやろう。行くぞ

「うん……」

二人は、蛇の出てきた穴の中に降りる。

「足元、気をつけるよ?」

「うん……平氣」

横穴を進んだ先に、大きな空洞が現れた。
どうやら、大蛇の寝床のようだ。

「何もないな、戻るか……」

言いかけた明は、足元に、乾いた音を聞いて動きを止めた。
足元一面には、様々な骨片が、散らばっていたのだ。
どれも、碎かれて、原形を留めている物は少ない。

「ま、まさか……ヨミも?」

明は、力なく座り込んだ。

「行こ、う、明……もう、ここにいない方がいい」

「どうしよう、氷雨……あたしのせいだつ」

骨を握りしめて、明は突つ伏せる。

「どうあえず、ここを出よう。ほら、立て」

「明う、もう泣くなつて……な?」

「はあ……ヨミ……」

泣きやまない明に、一つため息をついて、氷雨は、大蛇の尻尾に座つた。

とりあえず、とりとめのない話題をふつてみる。

「これ、食えねえかな? なあ、明……んんつ?」

氷雨の表情が、一気に険しくなった。

ひっくり返した蛇の尻尾は、裏側がひどく食い荒らされていた。
そして…

「キューイ…げふつ！」

犯人発見。

氷雨は、ヨミをつまみ上げて、大音声で怒鳴った。

「てめえっ、俺がどんだけ捜したと思ってやがる

正確には、明が、である。

「ヨミ！生きてたのかつ、よかつたあ」

明は、氷雨からヨミを取り上げて、頬ずりした。

「クルル…「ロロ」」

微笑ましく、再会なんかしている脇で、氷雨一人が、黒いオーラを
出していた。

「明、ちょっとじつちこい」

「なに？」

「これ、まだ何かあるぜ？いま光つた」

氷雨は、言いながら、足先で尻尾をつつく。

「なにが？ただの尻尾だろ」

「キュウウ」

ヨミも、蛇の尻尾で爪を研いでから、物言いたげに、明を見あげた。

「お前も、そう言つてるの？ヨミ」

「キイツ！」

「うおわつ！」

突然、自分の方に飛んできたヨミを、氷雨は慌ててよけた。

ヨミが噛みついたのは、大蛇の尾だった。

瞬間、いくつもの、月を集めただような光が、宵闇を切り裂いた。

視界がぼやけた二人は、しきりに目を擦る。

「なつ、なんだ、今のは」

「わ、わかんない…目が潰れるかと思った」

「ミ」

「ん、なんだ、ミミ……」

ミミは、甘えるように明の足首にまとわりつき、衣の裾を銜えて引つ張つた。

「刀……？」

明は、ミミに促されて、刀を拾い上げた。

「なんだ…どうしたんだ、その刀」

ひょい、と氷雨が顔を覗かせる。

大蛇の尾から出た刀は、夜田にも青田へ輝き、柄と鞘に、鱗の紋様を浮かび上がらせていた。

「わからない、けど…きれい」

「明、それ、お前が持つてな」

「えつ？でも、これ倒したの、氷雨だろ？あたしじゃない」

明は、刀を氷雨に差しだすが、氷雨は受け取らずに、笑つた。

「俺は少うし手伝つただけで、何もしてないよ、お前の手柄みてえなもんだ。それに、俺はもう持つてるしな」

氷雨は、腰に差してある刀を、叩いてみせて言つた。

「うん、あたしの、刀かあ…なんか嬉しいつ」

笑つた彼女の背中を、払暁が照らす。

いつもの、半魔の姿に戻つていた。

ヨミが、一つ身震いして巨大化し、欺いた。いなな

嘶いた、といつても、馬のようにではなく、虎の声で吼えたのだ。出立を、促しているようだ。

「え、ヨミ…もう行くのか？」

明は、生あぐいをしながら言つ。

明も、氷雨も寝不足なのだ。

「少し休ませてくれよ、ヨミ」

「ね？ミミ、いい子だから」

二人が、いぐら懇願してもミミは、イヤイヤをするよつこ、頭を振つた。

「もう、ミミは…おいで？」

明が、ヨミの前に屈むと、ヨミは、小さな本性に戻った。

長い耳をぺしゃりと下げ、小さな鼻面を、明の手に押しつけて甘える。

「ヨミ、少し休ませてくれ……少しだけだ」
しかし、ヨミは聞き入れずに、首を横に振り、服の裾を銜えて引っ張った。

「イヤなんだと、仕方ねえ……移動しようつぜ?」

「そうだな……」

苦笑し合う二人。

ヨミは、一人だけ嬉しそうだ。

「さあて、行きますかね!」

見あげる空は、どこまでも高い。

もう、秋が近いのかも知れない。

二人と一匹の、標のない旅は、今日も続く。

あわや一 大蛇の穴（後書き）

いつも、維月です。

読者さま、ここまで「くわうさま」です。

ヨハ、ここで本性現します。

氷雨と明、このバカッフルな二人を、どうしましょつか…

： - 〇（汗）

えー…これからも、精進します、よろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0946a/>

妖幻抄 7章

2010年10月10日02時03分発行